

紹介

歩行者の滞留の場となるステージ付きの広場。骨董市や野外映画の上映など多くのイベントも行われています。古い洋館風の七日町駅やレトロ調ボンネットバスもまちの雰囲気を高めています。会津の商業文化が息づく町並みをつくりだすことで、20万人近くの観光客を集めています。



AIZUWAKAMATSU

会津らしい風情を生かしたまちづくり

●七日町通りまちなみ協議会「会津若松市」

かつてのにぎわいを取り戻したい

「まちを良くするとか、そんな大それたことは考えていませんでした。ただ、昔のにぎわいを取り戻したかった」。七日町通りまちなみ協議会の洪川恵男^{とよお}さんは、まちづくりに取り組み始めた時の気持ちをそう話します。

失われた光景

会津若松市の中心部に位置する七日町は古くから市が開かれ、藩政時代から昭和30年代まで会津の繁華街として大変栄えていました。しかし、今から十年余り前、子ども時代に町を離れていた洪川さんが、約30年ぶりに戻ってみると、そこには「様変わりしたまちの姿」がありました。空き店舗が目立ち、歩く人がほとんどいない「シャッター通り」になっていたのです。

キーワードは
交流人口

洪川さんはこの状況を何とかできないかと、友人たちと活

「昔のにぎわいを取り戻したかった。」

動を始めます。全国のまちを徹底的に研究するとともに、通りや建物を調査した彼らは、七日町に残る歴史的な建造物を生かし、会津らしい町並みを再生することで、にぎわいを創出する構想を描きます。

活性化の鍵を交流人口と考え、商売の対象を地元の人たちか

誰もが
あきらめていた

ほとんどの方が時代の流れだから仕方がないとあきらめていた中、最初は誰も相手をしてくれなかったといいます。それでも、洪川さんたちは粘り強く働き掛けを続け、地域が一体となってまちづくりに取り組む気運を盛り上げていきました。

戻ってきたにぎわい

いま七日町には、会津の商業文化が息づく町並みの散策や買い物などを楽しみに多くの観光客が訪れます。一時は7割近くあった空き店舗も解消され、にぎわいが戻りつつあります。たった数人から始まった活動が大きな成果を生み出したのです。

洪川さんは「世代を超えて誰もが訪ねたくなる魅力あるまちにしていきたい」と話します。